

会員の声

天文学は社会に必要か？ ～社会における天文学の役割を考える 年会セッションのご案内～

高梨直紘（国立天文台）、平松正顕（中央研究院）、塚田健（星の子館）

1. 天文学は社会に必要か？

天文学と社会の関係について考える上で避けることの出来ない命題だが、この問いにきちんと答えるのは、なかなか難しい。しかしながら、社会における天文学の役割を明らかにし、その重要性を天文学に関わる者が自分なりに理解しておくことは、天文教育あるいは天文普及を進めていく上で有意義であると私は考える。なぜなら、明確な目標を設定することで、なにをどこまですれば良いのか、その達成のための効果的あるいは効率的な道筋を立てやすくなると考えるからだ。また、自分のスタンスを明らかにすることは、他者との関係を明確にし、より良い協力関係を築くための礎となるだろう。きちんと考えを整理しておくことは、内部に向けては力強い動機となり、外部に対しては大きな説得力を持つ。したがって、私は最初に挙げた命題について吟味することが、たいへん大事だと考えている。

考えるべきポイントはたくさんある。

そもそも、「天文学」とはなんだろうか。どこまでが「天文学」なのかは、人によりけり、さまざまな考え方があり得る。「社会に必要な天文学」は、「天文学」全体を含まないかもしれない。

「社会」とは、どこまでを指すのだろうか。日本なのか、アジアなのか、それとも世界全体なのか。先進国における「社会」と、発展途上国における「社会」ではまた状況が違って来るだろう。あるいは、現代の「社会」と近未来の「社会」、さらにはずっと先の「社会」

でも議論は違ってくるのかもしれないし、そのような時間軸に左右されない存在なのかも知れない。

どの程度「必要」なのかも、難しい。今にも飢えて死にそうな子供がたくさんいる国では、天文学はどの程度「必要」なのだろうか。世の中には「必要」なことがたくさんあるだろうが、天文学はそこではどの順位に位置するものなのだろうか。

今更そんな話…という向きもあるかもしれないが、天文教育普及研究会に所属する会員の多様なバックグラウンドを考えれば、各自が「常識」だと思っている認識からして一致していない可能性は高い。そして、その多様性こそが本会の強みではないかと私は考えている。お互いにどのような事を考えているのか、今年の年会の場に特別セッションを用意することにしたので、お互いに意見をぶつけてみてはいかがだろうか。今年は世界天文年、日頃なかなかゆっくりと考えることの出来ない問題について、夏の夜にじっくりと考えてみたい。